

多摩六都科学館 令和6年度（2024年度）事業評価総括シート 1.将来像毎の事業評価

参考

使命（30年後）	将来像（10年後）	中期目標（5年間）（令和6～11年度）	実施者 凡例 ●：指定管理者 ■：多摩六都科学館組合	令和6年度 達成目標（P）	令和6年度 結果・成果（D）	評価（分析・検証、課題抽出）と次なるアクション（CA）	自己評定
多摩六都科学館は、誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な「学びの場」を地域の皆さんとともにづくりあげ、地域の文化振興に寄与することをめざします。 ➡多摩六都科学館がめざしたい圏域の将来像（30年後の長期的アウトカム） ●圏域の多くの人々が、科学リテラシーを高め、地域の魅力や価値に愛着を感じ、より豊かな人生を過ごすことができる社会 ●圏域全体の魅力が高まり、圏域全体が潤う社会	科学館事業（中核事業） 将来像1：多様な学びの場の創出 ➡10年後のアウトカム 誰もが科学の楽しさを体験し、新たな価値を見出し、科学の視点で世界を見ることができる	科学館事業（中核事業） 将来像1：多様な学びの場の創出 1. 圏域市民や利用者の科学リテラシーを高めるため、体験とコミュニケーションを軸とした活動により、人々の興味・関心に応じた多様な学びの機会を提供する。（継続） 2. 将来の世代に科学との向き合い方や地域の価値を適切に継承していくため、地域資源や科学教育の調査・研究及びその成果の普及・発信活動を推進する。（継続・強化） 3. 人々が成長する科学館をめざし、様々な立場の人々と出会い、学び合い、ともに視野が広がる場をつくりあげる。（継続・強化）	科学館事業（中核事業） ●学校団体以外の平日利用者に向けたプログラムの開発と試行を行う。（継続） ●「ロボット展」など人気コンテンツに、科学的価値や専門的な情報発信の強化を図る。（継続・強化） ●利用者や市民が利用・参加しやすいしくみづくりを促進する。（見直し・改善） ●■地域資源の調査・研究のため、地域の文化施設の構成員と横つなぎを広げる。（継続・強化）	●大人向けプラネタリウムを実施。平日で観覧者数が100人を超える回もあつた（平日回は1,534人/9回）。 ※事業報告書「1-3 天文映像活動」参照（p29） ●大人向けプラネタリウムに合わせて、水曜日の午前に大人対象の講座を実施（単発講座8回、連続講座2種10回）。プラネタリウム観覧とは別の層が参加している傾向が見られる。 ※事業報告書「1-4 参加体験学習活動」参照（p34） ●平日の一般来館者を対象としたラボプログラム実施（参加：754人/138日 参考：学校向けラボプログラムに混ざり参加した一般来館者 1,936人）。	●平日の大人向けプラネタリウムの認知が広まり、定着してきているので継続する。 ●大人向け講座のニーズがあると考えられるので、新規利用者層の開拓を念頭にテーマ検討やコンテンツの固定化を図りつつ、広報戦略を立て、多様な層の取り込みを図る。 ●平日については、人数は少ないが小学生のリビーターや親子の口コミ参加が見られる。開催の告知を広め、未就学児親子や近隣の小学生の利用機会増を図る。	A	
1	評価指標	・年間利用者数（総合的な指標にするか要検討） ・平日の個人利用の来館者数（学校団体利用を除く） ・来館者満足度（出口調査）	●年間利用者数 令和5年度：200,070人/292日 令和6年度：221,432人/294日（昨年度比10%増） ●平日の個人来館者数（有料） 令和5年度：11,086人/134日（1日平均83人） 令和6年度：11,907人/140日（1日平均85人） (昨年度比3%増) ●来館者満足度 令和5年度：95.1% 令和6年度：96.0% (昨年度比0.9ポイント増) (出口調査：収集方法：タブレット及びQR、令和5年度回答数545件/利用者20万70人、令和6年度回答数802件/利用者22万1,432人)	●年間利用者数の増加に対し、平日の個人来館者数の伸びは下回り、土日祝・繁忙期の利用者増が年間利用者数に大きく寄与する。 ●平日の個人来館者数は推移する一方で、平日の投影・上映や講座の実施日は他の平日に比べ優位に来館者数が上回ることから、平日の個人来館者数を増やす施策として、令和7年度も平日の投影・上映や講座の実施とその周知を継続・強化することが望ましい。 ●満足度は高水準で推移し、現状のソフトウェアのサービスを継続すれば、満足度を増やすための特段の施策は不要であると考える。一方で、ハードウェアに関する利用者からの指摘が増えてきた場合は、中長期計画の修繕で対応可能か、特段の措置が必要かを検討していく。	B		
2	地域拠点事業 将来像2：多摩六都の交流拠点	地域拠点事業 将来像2：多摩六都の交流拠点 ➡10年後のアウトカム 多摩六都科学館が地域の交流拠点として、利用者や市民が自己実現をかなえることができる	地域拠点事業 ●幅広い年代に向けたプログラムを実施する。（継続） ●多摩六都科学館ボランティア会をはじめ、市民の社会参画を支援する。（継続） 中期目標3および4は、次頁に記載	●0歳からのプラネタリウムを実施（1,171人/8回）。実施日には特設授乳スペースなどの設置を含め、未就学児とその保護者が来場しやすい環境を整えた。 ●春の企画展「カレーのヒミツ展」は子どもに人気のカレーをスパイスの紹介を軸に実施。ファミリー層にとどまらず、中高生やスパイスカレーに興味を持つ大人など、日頃科学館にあまり来ない層の来館にもつながった。 ●ボランティア会は、からの部屋での各曜日班の活動のほか、講座型のたまごくサイエンスラボ、展示室等でのワークショップを開催した。これらの活動のサポートや安全に実施するための助言、並びに新規入会に係る事務作業などを行った。 ●例年どおり市民・東大生態調和農学機構と連携した「農と食の体験塾」を実施したが、指定管理者内の組織再編により科学館スタッフが参加できる機会が減り、事務局機能が十分果たせるまでの参画ができなかつた。	●利用者の動向からターゲットである子育て世代に届きやすい広報媒体が把握できたので、他の事業でも活用していく。人気は高いが、業務負担も大きいので、他の事業とのバランスを考慮した実施体制の検討の必要あり。プラネタリウム以外への利用範囲の拡大についても検討する。 ●カレー展は科学色を薄めに打ち出したことで、来館のハードルが下がったと考えられる。コンテンツの科学性はそのままに、開催の案内ではキヤッキーさを意識するなど、多様な層の興味を引く工夫を意識する。 ●ボランティア会の活動が活発になってきたが、活動休止期間中の科学館のルール変更やメンバー間の引き継ぎが絶えていたこと、また指定管理者内の組織再編や担当者の変更等も重なり、様々な場面で認識の相違を埋めることが難しく、実施体制の立て直し中である。これを機に研修内容など既存の内容の見直しを図る。 ●様々な市民と連携した活動を行ってきたが、現在の人員配置や業務量で可能な支援の形や程度を精査し、持続可能な地域との連携の在り方を考え、館全体で共有していく。	B	

使命（30年後）	将来像（10年後）	中期目標（5年間）（令和6～11年度）	令和6年度 達成目標（P）	令和6年度 結果・成果（D）	評価（分析・検証、課題抽出）と次なるアクション（CA）	自己評定	
多摩六都科学館は、誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な「学びの場」を地域の皆さんとともにづくりあげ、地域の文化振興に寄与することをめざします。 ➡多摩六都科学館がめざしたい圏域の将来像（30年後の長期的アウトカム） ●圏域の多くの人々が、科学リテラシーを高め、地域的魅力や価値に愛着を感じ、より豊かな人生を過ごすことができる社会 ●圏域全体の魅力が高まり、圏域全体が潤う社会	地域拠点事業 将来像2：多摩六都の交流拠点 多摩六都科学館は、世代を超えて交流し、生涯学習や社会参画の場として活用できるよう、地域みんなに開かれた交流拠点をめざします。 ➡ 10年後のアウトカム 多摩六都科学館が地域の交流拠点として、利用者や市民が自己実現をかなえることができる	地域拠点事業 将来像2：多摩六都の交流拠点 1. 地域の社会参画の場となるために、ボランティアをはじめ多くの地域の市民や機関などが活動に参加できるよう、環境整備や活動支援を進める。（継続・強化） 2. 地域の学びを支えるため、地域の協力者とともに学校教育の支援や生涯学習の場の充実を図る。（継続） 3. 地域の文化活動の活性化につながるように、科学館が、人々や情報が集まりつながる交流拠点となる。（継続・強化） 4. 地域の価値向上に貢献するため、地域交流事業を通して、地域資源の価値発信を行う。（継続・強化）	● ■ 地域の企業や博物館と連携・協働した事業を推進する。（継続・強化） ● ■ 「たまろくとWiーク」や「市民感謝デー」を継続して実施する。（継続）	● 科学館内外の催しや各種プラネタリウム番組において、地域の企業や施設、研究機関と協力したプログラムを実施した。 ● たまろくとWiーク（12月3日（火）～12月22日（日）18日間）及び市民感謝デー（2/16、3/2、3/9日曜日）を開催した。併せて、たまろくと特産市（2月15日（土）～3月16日（日））を、圏域市の21の事業者の協力のもと、ミュージアムショップで展開した。 ■ 「たまろくとWiーク」「市民感謝デー」圏域市民の科学館へのアクセス改善のための無料シャトルバス運行の実施 「たまろくとWiーク」無料シャトルバス利用者数 336人（昨年度比0.7%増） 「市民感謝デー」無料シャトルバス利用者数 1,419人（昨年度比26.8%増） 圏域市民に対する周知強化のため、5市の公共施設へのポスター掲示等に組合も共に取り組んだ。	● シチズン時計（株）やグローブライド（株）との共催教室はじめ、例年行っている事業の多くが大変人気が高く、相手先との利害も合致するため、継続する。希少価値の高いイベントがあるものの、館内での価値共有が十分図られていないものも少なくないので、それができる余裕が持てるようになたい。 ● たまろくとWiーク・市民感謝デーともにポスター及びチラシを前年度と同じデザインとして習慣形成を図ることとした。認知度の向上を継続的に目指す。今年度の特産市では前年度から継続して出品してくれる事業者のほか、新規で4事業者の出品もあった。「地域の魅力発信」という目的の下、引き続き5市の行政とも連携しながら、科学館が交流拠点となるべくつながりを深めていく。 ■ 「たまろくとWiーク」及び「市民感謝デー」の実施目的や経緯に立ち返り、指定管理者と組合で連携して5市の協力を得ながら市民の目線に立ったよりよい事業内容としていく。	A	
			2 評価指標	● ボランティア活動の促進状況 ● 「たまろくとWiーク」と「市民感謝デー」の圏域5市の来館者数 ● 企業や専門機関との連携・協働事業の実施状況	● ボランティア会の毎日の活動として、展示室2「からだラボ」の活動は、夏休み以降ほとんど曜日便で定時の開催となった。子供向けの講座や太陽観望会、天体観望会、館外での活動を行った。 秋に新規ボランティアの定期募集を行い、高齢化や進学などの理由による退会者もいる中で、昨年とほぼ同数の登録数を推移している。 ▷ 参考数値 令和6年度は新規入会22人（ジュニア10人含む）、ボランティア総会1回、ボランティア役員会及びリーダー会は毎月1回開催。ボランティア研修は2回実施。令和6年度末の会員数は一般113人、ジュニア26人、年間のボランティア活動人数は、のべ3,091人。 ● 「たまろくとWiーク」と「市民感謝デー」の圏域5市の来館者数 ■ 圏域市民割合20%（圏域市民1,666人/全来館者数8,393人） 昨年度比 圏域市民25.0%増/全来館者3.8%増 ※ 昨年度 圏域市民割合16%（圏域市民1,332人/全来館者数8,085人） ● 市民感謝デー（2/16、3/2、3/9日曜日） ■ 圏域市民割合50%（圏域市民2,961人/全来館者数5,936人） 昨年度比 圏域市民14.7%増/全来館者14.3%増 ※ 昨年度 圏域市民割合50%（圏域市民2,581人/全来館者数5,192人） ● 企業や専門機関との連携・協働事業の実施状況 ■ 事業報告書「多摩六都圏域における連携・交流」参照（p56～57）	● 元々高齢化や後継者育成が課題となっていた中で、感染症拡大に伴う3年間の活動休止期間を経て、令和6年度は本格稼働に向けて体制を整える1年となった。令和7年度は、ボランティア活動の更なる自立運営と本格稼働のため、指定管理者としてボランティア活動のしくみの整理を行い、必要な支援を行っていく。 ● 入館料の減免額が半額であることに鑑みて、全額減免の市民感謝デーにおける圏域市民の割合（50%）のおおむね半分の利用率は適当と考えるが、引き続き来館動機につながる企画となるよう取り組んでいく。 ● 通常、全入館者数の内訳として、圏域市民の割合よりも圏域外からの来館割合の方が多いので、感謝デーにおいて、圏域市民の来館が全来館数の半分の割合を占めていることの成果は高いと言える。引き続き、圏域市民の満足度を維持しつつ、初めての来館者にリピーターになってもらう企画や、これからのかの来館動機につながる企画となるよう取り組んでいく。	B
パブリック・リレーションズ 将来像3：愛着の持てるロクトへ 多摩六都科学館（愛称：ロクト／Rokuto）は、市民から愛着を持って「自分の科学館／地域の科学館」と認められる存在となり、利用者や地域の皆さんとのよりよい関係づくり（パブリック・リレーションズ）をめざします。	パブリック・リレーションズ 将来像3：愛着の持てるロクトへ 1. ロクトの認知度を高めるため、圏域市民にロクトの価値を情報として届け、多様なターゲットに向けた広報戦略を確立する。（見直し・改善） 2. 「自分の科学館／地域の科学館」として愛着を持つて認められるため、ニーズの調査や活動成果の発信を通じて市民との信頼関係を築く。（見直し・改善） 3. 科学館の支援者・パートナーを増やすため、利用者や地域の団体等の多様な主体との連携強化やよりよい関係の構築を推進する。（見直し・改善）	3 パブリック・リレーションズ ● 広報全体を包括して戦略的に実施する基盤を整備する。（見直し・改善） 1. ロクトの認知度を高めるため、圏域市民にロクトの価値を情報として届け、多様なターゲットに向けた広報戦略を確立する。（見直し・改善） 2. 「自分の科学館／地域の科学館」として愛着を持つて認められるため、ニーズの調査や活動成果の発信を通じて市民との信頼関係を築く。（見直し・改善） 3. 科学館の支援者・パートナーを増やすため、利用者や地域の団体等の多様な主体との連携強化やよりよい関係の構築を推進する。（見直し・改善） ● アンケートの収集方法や収集内容を工夫し、結果を分析する。（見直し・改善）	● ロクトニュースの情報収集・掲載のためのコンテンツの選択・編集をシステムとして整備した。 ▷ 「ロクトニュース」：「ロクトニュース」は、年6回、毎号平均18万5,000部を発行。 ▷ 「ロクトニュース以外の媒体」：イベントの「チラシ」や「ポスター」を適宜作成し、構成市の市役所以外の図書館や公民館、地域センター等の公共施設全てに掲出。西武鉄道（株）の協力を得て、5市内の駅と西武鉄道のターミナル駅に掲出。 「マスメディアの活用」：「プレスリリース」を前年度の2倍の回数で行うとともに、プレスリリース配信サイト「PR TIMES」への情報発信を開始したことにより、他サイトにも転載され、その結果取材依頼や情報提供依頼が増えた。その他、「市報」だけでなく、市の公式「LINE」や「子育てアプリ」に情報発信を行った。 ● 従来の閉館時アンケート（タブレット使用）に加え、閉館中のアンケートを計画的に10回実施。 ・ 10回の内訳は、市民感謝デー開催日、夏休みの平日、休日、秋の平日、休日、ロクトWiーク無料バス運行日 ・ 従来の回答率0.27% → 回答率20%以上へ ・ より信頼度の高い分析結果を得られた。	● アナログ媒体のロクトニュースは構成5市と近隣地区にも情報を発信し、ロクトの取組を市民に届ける重要な広報媒体となっている。ペーパーレス化の影響を受け、発行部数は前年度より毎号約1万5,000部減らした。その他のアナログ媒体としてチラシやポスターを用いて露出を高めたことで、リピーターだけでなく、未利用者の来館動機にも繋がったと考える。マスメディアやデジタル媒体を積極的に広報媒体として活用した結果、各世代にロクトの取組を発信することができ、今年度の利用者前年度比10.7%増にも貢献したと考える。 次年度はタスクフォースチームが主となり、周知の効果を分析し、科学館の広報媒体の選択と集中を行っていく。 ● 利用者の年齢層や、リピーター率、満足度はこれまでのアンケートから得ている結果と相違ない。広報におけるSNS活用が不十分な点やアクセスに関する課題など、これまでよりも具体的に見えた点を今後の取組に生かしていく。	A B		

使命（30年後）	将来像（10年後）	中期目標（5年間）（令和6～11年度）	令和6年度 達成目標（P）	令和6年度 結果・成果（D）	評価（分析・検証、課題抽出）と次なるアクション（CA）	自己評定
多摩六都科学館は、誰もが科学を楽しみ、自分たちの世界をもっと知りたいと思える多様な「学びの場」を地域の皆さんとともにつくりあげ、地域の文化振興に寄与することをめざします。 ➡多摩六都科学館がめざしたい地域の将来像（30年後の長期的アクトカム） ●地域の多くの人々が、科学リテラシーを高め、地域的魅力や価値に愛着を感じ、より豊かな人生を過ごすことができる社会 ●地域全体の魅力が高まり、地域全体が潤う社会	パブリック・リレーションズ 将来像3：愛着の持てるロクトへ 多摩六都科学館（愛称：ロクト／Rokuto）は、市民から愛着を持って「自分の科学館／地域の科学館」と認められる存在となり、利用者や地域の皆さんとのよりよい関係づくり（パブリック・リレーションズ）をめざします。	パブリック・リレーションズ 将来像3：愛着の持てるロクトへ 1. ロクトの認知度を高めるため、圏域市民にロクトの価値を情報として届け、多様なターゲットに向けた広報戦略を確立する。（見直し・改善） 2. 『自分の科学館／地域の科学館』として愛着を持って認められるため、ニーズの調査や活動成果の発信を通じて市民との信頼関係を築く。（見直し・改善） 3. 科学館の支援者・パートナーを増やすため、利用者や地域の団体等の多様な主体との連携強化やよりよい関係の構築を推進する。（見直し・改善）	●圏域大学を中心に大学生など青年層の認知度向上策を実施する。（新規） ●■開拓の余地がある幼稚園・保育園への働きかけを行う。（新規） ●■多摩六都科学館の支援者やパートナーを増やしていくための支援体制・受け皿を整備する。（見直し・改善） ●■「たまろくとWiーク」や「市民感謝デー」を実施することによって、市民から「地域の科学館」として愛着を持ってもらうよう働きかけを行う。（継続）	●大学生の認知度向上を図り、圏域5市に在住・在学する大学生を対象に「ロゴマーク募集」コンペを実施した。個人・団体合わせて25点の応募があり、最優秀作品を新制服のロゴに採用。学園祭のイベントにも協賛施設として物品（招待券）提供をする等、青年層の利用促進と認知度向上に努めた。 ■平日利用者の増加対策として、地域の幼稚園や保育園の団体に対して対話による周知活動を実施するため、圏域市の子育て支援担当課に連絡をし、圏域で開催する各園長会でのPR機会の確保に係る日程調整を行った。清瀬市、西東京市の私立幼稚園園長会は、市が関与していないため、直接幹事団と日程調整を行った。 日程調整を通じて、圏域市の子育て支援担当課や圏域私立幼稚園とのつながる機会を持つことができた。 ●■1～2月に圏域内の幼稚園、保育園の園長会に出向き利用促進の為のPR活動を行った。幼稚園53件、保育園154園に来年度の予約に向けた資料を配布した。	●今年度初めての試みを行い、当企画を機に圏域に在する大学との接点を持つことができた。そのつながりを維持・活用して、青年層への認知度を高めるための企画・取組を継続していく。	B
財政計画・体制整備 将来像4：持続可能なしくみづくりを	財政計画・体制整備 将来像4：持続可能なしくみづくりを	財政計画・体制整備 1. 健全な財政基盤の整備のために、多様な収入源や外部資金等を適切に確保する。（見直し・改善） 2. 科学館の将来に備え、戦略的かつ計画的な人材育成・確保を実施する。（見直し・改善） 3. 魅力的な科学館を継続して運営するために、建物・設備・展示・プラネタリウムの長期保全計画を策定する。（見直し・改善）	財政計画・体制整備 ●■広報・地域連携・財源確保など課題解決に向けた組織体制を整備する。（見直し・改善） ●■財源基盤整備のため、団体サポーター制度の見直しなどの寄附金制度の整備を図る。（見直し・改善） ■長期保全計画の策定に向けて、耐力度調査を実施する。（見直し・改善）	●組織再編を行い、総務、みらい創造、アテンダント、天文、理工、自然、インターブリッターの7グループ体制とし、スピーディーに課題解決をするためのしくみを構築した。 ■令和6年4月に欠員2名の補充を行い、組織体制を整えた。 ●法人・団体サポーター制度のリニューアルを行った。特典を大幅に見直すなどし、3月末時点では、これまで支援のなかった2企業が新たにサポーターとなった。 ■サポーター制度と寄附金制度を効果的かつ効率的に運用していくために、圏域法人・団体を対象とした周知方法について指定管理者と組合で検討、協議を行った。 ■多摩六都科学館組合寄附金取扱要綱を制定・施行し、制度周知用のチラシを作成のうえ、法人・団体サポーター制度と併せて募集を行った。（10月制定、11月施行、3月募集） 令和6年度寄附実績：1件、50万円 ■コンクリート強度等、鉄筋腐食状況、鉄骨腐食状況及び屋上・外壁等の漏水状況の調査を実施。調査結果より今後期待できる使用年数は50年との見通しをたてることができた。	●組織の改編は成功したと考えている。しかし、業務量の偏りや担当の区分けが曖昧な業務も見られるので、改善を図り、組織全体の更なる成長を目指す。 ■新たな職員体制のもと、財源確保などの課題解決に取り組み、実績を上げることができた。今後も様々な課題解決に対応できるよう、小回りよく柔軟に実施体制を検討し、整えていきたい。 ●新規サポーターは最終的に6件となったが、目標には至らなかった。原因は営業力の無さであると分析しており、次年度は担当替えや外部委託なども視野に実施方法を検討する。 また、次年度は個人サポーターの制度の見直しに着手する。 ■寄附金制度の整備 健全な財政基盤の整備のために、寄附金制度を整備したが、制度周知の内容、方法等について課題があったため、次年度以降に改善していきたい。	A
取り組み方針 凡例	継続：これまで同様継続して実施する	第3次基本計画時の段階評価の基準	S 所期目標を定量的にも定性的にも上回る顕著な成果を挙げている	●サポーター制度の見直しをおこない、新たにパンフレットも整備した。3月11日から7企業・団体に募集の営業活動をおこない、3月末までに新規2件の申し込みに至った。 ■多摩六都科学館組合寄附金取扱要綱を制定、施行。チラシの作成。	■耐力度調査結果内容を踏まえて、50年間程度の長期保全計画の策定に指定管理者の協力を得ながら取り組む。（対象建物名：多摩六都科学館（展示棟・管理棟・プラネタリウムドーム・休憩棟）） ●3月末時点での申し込みは2件は見込みを下回っている。 次年度の対応は上記のとおりとする。 ■制度周知の内容、方法等の検討。	B
継続・強化：これまで同様に実施するが、さらにその機能や活動を強化する	見直し・改善：これまでの取り組みを見直し、改善した上で取り組む	C 所期の目標を達成できていない点があり、改善を要する	D 所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する			
新規：年度内に新たに取り組む	新規・要検討：新たに取り組むため、年度内に検討を行う					

取り組み方針 凡例
継続：これまで同様継続して実施する
継続・強化：これまで同様に実施するが、さらにその機能や活動を強化する
見直し・改善：これまでの取り組みを見直し、改善した上で取り組む
新規：年度内に新たに取り組む
新規・要検討：新たに取り組むため、年度内に検討を行う

第3次基本計画時の段階評価の基準
S 所期目標を定量的にも定性的にも上回る顕著な成果を挙げている
A 所期の目標を上回る成果を上げてる
B 計画に則して、所期の目標を概ね達成している
C 所期の目標を達成できていない点があり、改善を要する
D 所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

多摩六都科学館 令和6年度（2024年度）事業評価総括シート 2.総評

自己評価		外部評価	
将来像	多摩六都科学館組合の総合的な所見	指定管理者の総合的な所見	
		評定	総括的な意見（総評）
1	<ul style="list-style-type: none"> 「多様な学びの場の創出」については、平日における高齢者や主婦、学生などを対象としたプログラムの提供や、体験プログラムの募集方法や実施方法などを工夫することにより、より多く人々の学びの機会を提供することができた。今後においても圏域文化施設と連携して地域資源の調査・研究に取り組むとともに、その結果を社会に還元して科学の学びの機会の裾野を広げ、科学リテラシー向上の役割を果たしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「多様な学びの場の創出」については平日来館可能な層の掘り起こしを意識し、「大人向けプラネタリウム」と「0歳からのプラネタリウム」では効果の高い広報手段の試行錯誤を続けた結果、毎回十分な来館者を呼べる事業として定着した。大人向けプログラムもテーマごとに多様な参加者が集まることを踏まえ、新規利用者を意識した内容の検討を重ねたい。 <p>人気が高いプログラムや企画展では受付方法や対象範囲の設定を見直し、メインゲートがストレス無く体験できる形ができつつある。</p>	<p>●今年度事業の成果に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 「多様な学びの場の創出」という将来像達成に向けて、平日に大人向けプラネタリウムや講座を実施したり、当日申込や開放型プログラムを増加させるなど利用ニーズに鑑みてプログラムの多様化を図り、多様な学びの機会の提供に努めている点を評価する。 中期目標2と3については、清瀬市郷土博物館との連携事業や地域の文化施設の学芸員との研修会実施など、指定管理者・組合が一体となって地域の文化施設等との交流を深化・拡大したことには意義があるものとして評価する。 <p>●今後の課題・今後への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> プログラムの構築にあたっては、科学リテラシーを高めるための取り組みに留意して成果・効果を見極めることができることから、今後はさらに職員研修や調査・研究の時間を確保し、各々の活動の拡充を図ることによって、学びの場の充実に期待している。 地域の研究機関や企業、大学や文化施設等との連携は、今後も継続・発展することを望む。
2	<ul style="list-style-type: none"> 「多摩六都の交流拠点」については、前年度から本格的に再開したボランティア活動が活発化している。今後も地域の人々の社会参画の場として機能するよう、新たな団体などの活動支援を含めて環境整備を進めていきたい。また、圏域5市で管理運営している特徴を認識しながら、既存事業だけでなく、地域の人々がより身近に感じてもらえる交流事業や地域の魅力を発信する事業の実現を模索していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 「多摩六都の交流拠点」では、活動が全面的に再開・活発化したボランティアとの開催ルールの共有や条件調整に予想以上の時間・労力が割かれ、引き続き信頼の基盤性の再構築が急務である。 <p>その他団体とは定番事業を行うことで手いっぱいだったが、一方的な依頼ではなく双方アイデアを出し合った企画など、質的な発展が見られるものもあった。</p>	<p>●今年度事業の成果に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 「多摩六都の交流拠点」という将来像達成に向けて、多摩六都科学館ボランティア会の活動が再び活発化してきた点や地域連携事業なども適切に推進できた点を評価する。 中期目標3達成に向けて、科学館内外の催しや各種プラネタリウム番組において、地域の研究機関や企業、文化施設等と連携したプログラムを実施した点を評価する。 中期目標4達成に向けて、「たまろくとWiーク」や「市民感謝デー」の実施により、未利用者の開拓や特産市等を行ったことにより地域資源の価値発信をした点を評価する。 <p>●今後の課題・今後への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動や地域連携については、対応する内部体制づくりが課題となっているので対策を講じ、地域の社会参画の場としての機能強化を図っていただきたい。 ボランティア活動の持続性や次世代育成の観点から、特に若年層が主体的に科学館事業に参加したり、児童・生徒・学生をサポートできる仕組みを強化することを望む。 「たまろくとWiーク」と「市民感謝デー」は、市民の目線に立った事業内容に改善しながら継続・強化を図ってほしい。
3	<ul style="list-style-type: none"> 「愛着の持てるロクトへ」については、広報媒体だけでなく、これまで課題となっていた大学生の認知度向上を図る取組や、地域の幼稚園・保育園への対話による周知活動などを通じて、ロクトの認知度向上や地域の人々とのよりよい関係性の構築に努めた。今後も利用者アンケートなどにより的確に利用者実態を把握するとともに地域の人々にとってロクトが身近な存在として感じてもらえるよう、効率性を求めるだけでなく、効果的な方法により活動を展開していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「愛着の持てるロクトへ」については、広報誌「ロクトニュース」のコンテンツ選択と編集をシステム化することで、編集に係る担当者全員が俯瞰して事業の目的や価値を見るようになった。さらに、ロクトニュース以外の媒体も活用し、呼び込みたい世代へ向けた情報発信に積極的に取り組んだ結果、認知度向上と利用促進に繋がり、利用者前年度比10.7%増に貢献した。 <p>広報以外では、開拓の余地のある保育園・幼稚園団体への周知活動や青年層への認知度向上策の実施、団体サポーター制度の見直しを行ななど、新たな施策に挑戦した。次年度も手法や内容を見直しながら、継続・強化して各施策に取り組む。</p>	<p>●今年度事業の成果に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 「愛着の持てるロクトへ」という将来像の達成に向けて、令和6年度はこれまでの事業の見直しと新たな取り組みを目標に掲げ、「大学生など青年層の認知度向上策の実施」や「幼稚園・保育園への働きかけ」などを行った。成果はまだ不十分であるが、まず第一歩を踏み出した点を評価する。 中期目標1の達成に向けて、広報全体の見直しを行い、有効に機能している紙媒体の「ロクトニュース」のほかに、新たに圏域内の駅及び西武線の主要な駅を加えるなどポスター・チラシの掲出場所の拡大やプレスリリース配信の倍増、市の公式「LINE」や「子育てアプリ」のデジタル媒体を利用した情報発信など、広報機会の拡大を図った点を評価する。 <p>●今後の課題・今後への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> 現在のPR活動は、科学館から市民への一方向になりがちなため、「ロゴマーク募集」や「法人・団体サポーター」「個人サポーター」の制度改革などを含め、圏域市民との双方向コミュニケーションがさらに活性化されるよう期待する。 人的にも予算的にもアウトドア活動として圏域の学校や公民館、図書館等に出向いての活動には制限があるため、園長会でのPR活動や招待券の配布などこれまで効果を上げている取り組みを参考に、圏域市民、特に子どもたちやファミリー層からさらに愛着を持ってもらえるよう、中期目標2の達成に向けての取組検討を図っていただきたい。
4	<ul style="list-style-type: none"> 「持続可能なみづくり」については、物価高騰や人件費の上昇など近年の社会経済情勢の変化により運営上の重要課題となっている項目であるが、団体サポーター制度の見直しや寄附金制度の整備を行い、財源確保の成果を上げることができた。次年度においては、現有施設の老朽化対策に向けた長期保全計画を策定するとともに、財源確保に努めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 「持続可能なみづくり」では、スピーディーに課題解決するしくみと体制作りのため、組織を7グループ制に改編して、広報・地域連携・財源確保などの課題に取り組んだ。広報活動の見直しや地域の多様な主体との関係作り以外にも、財源確保の取組として、まずは団体サポーター制度の見直しを行い、既存制度の改善に取り組んだ。次年度は個人サポーター制度の見直しに着手するとともに、引き続き、職員の資質向上と組織の育成を行い、広報戦略の抜本的な見直しや地域連携の強化など、各課題に取り組む。 	<p>●今年度事業の成果に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 将来像4「持続可能なみづくり」の達成に向けて、令和6年度の達成目標3つがすべて「見直し・改善」であり、改善に向けてチャレンジの年であったことがわかり、すべての項目について適切に実施できたことを評価する。 広報・地域連携・財源確保の課題解決に向けて、組織再編を行い、シンクタンク的な役割を担う「みらい創造グループ」を新設し、いくつかの新事業を実施し、徐々に成果が上がっている点を評価する。 中期目標2の達成に向けて、新たな資金調達の方策として「法人・団体サポーター制度」のリニューアルに着手した点を評価する。 中期目標3の達成に向けて、施設の老朽化に対し建物の耐力度調査を実施した点を評価する。 <p>●今後の課題・今後への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> 建物や設備のみならず、科学館事業に係わるすべての人のウェルビーイングを目指して、人的リソースの体制整備にも努めてほしい。 近年の物価上昇や賃上げの影響によって、指定管理業務が事業規模の縮小や職員数の減少、待遇の改悪にならないように、設置者である圏域5市が協力して財政的支援を強化することを望む。 令和6年度の耐力度調査の結果を踏まえて、次年度の長期保全計画の策定では組合が指定管理者の協力を得ながら取り組まれたい。 将来像4は、将来像1～3の達成に深く関わるので、十分な成果が出るように組織・体制整備を進めてほしい。
総括	<p>第3次基本計画初年度の令和6年度の年間利用者数は、22万1,432人と前年度に比べて率で10.7%の増となった。4つの将来像の中期目標達成に向けて、様々な取組を実施し、一定の成果をあげることができたと自己評価する。</p>	<p>来館者数はプログラムの実施環境もほぼ感染症拡大前の状況に戻つた。令和6年度はこの流れが一時的なもので終わらないように戻ってきた利用者の定着と、さらなる新規利用者層の呼び込みを意識して事業を展開した。</p>	<p>●今年度事業の成果に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 開館後30年間、圏域5市の自治体や歴代の職員・ボランティアなど多くの人たちの尽力によって支えられ、圏域内外からの入館者が後を絶たない日本を代表する科学館のひとつにまで育った多摩六都科学館は、圏域5市にとってまさに「自慢の科学館」である。 設定した目標に対して適切な取り組みを概ね実行し、成果を出している。組織改編だけでなく、これまでの取り組みも見直しており、常に改善する姿勢は評価に値する。年間利用者数が約10.7%増となったことは現場の努力の表れであると考えられる。 <p>●今後の課題・今後への期待</p> <ul style="list-style-type: none"> 第3次基本計画では、自然科学や科学技術の理解・体験を中心に地域の多様な学びの場を作り、地域の文化振興に寄与することを目指している。この目標を掲げた初年度としては、中期計画5年間、将来像10年後、使命30年後をそれぞれ視野におき、中期的・長期的な戦略を立てるとともに、その評価のための指標や達成目標に対してエビデンスを示し、市民や設置者・関係者に説明することが重要である。 外部評価の事前準備段階で担当職員間で目標と取り組みに対する評価が十分に共通認識されていたとは言い難い。同じ目標に向かう同志として、職員間のコミュニケーションの強化を強く促したい。年度を通して定期的に自己評価を行い、中期目標・年度目標の達成状況の振り返りを組織で共有するよう取り組まれたい。

第3次基本計画時の段階評価の基準	
S	所期目標を定量的にも定性的にも上回る顕著な成果を挙げている。
A	所期の目標を上回る成果を上げてる。
B	計画に則して、所期の目標を概ね達成している。
C	所期の目標を達成できていない点があり、改善を要する。
D	所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する。